

タブ 1

【本文】

また、さやうに世をまつりごつ人のみにもあらず、ただ世の常の交じらひにつけても、この物のあはれといふことを知らぬ 方に思ひやりなくして、①(心こはごはしく)なさけなきことのみ多きものなり。すべて何事もその事に触れざれば、その事の【2】は知られぬものにて、富める人は貧しき人の心を知らず、若き人は老いたる人の心を知らず、男は女の心を知らず、世の諺にも「【3】」とも、また「子を持ちて親の恩は知る」ともいへるに、兼輔の中納言の、

【A】人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

といふ歌、俊成の三位の病限りなりし時に、「定家卿、中将転任のこと申す」とて、範光の朝臣のもとへおくられし、

【B】をざさはら風待つ露の消えやらでこの一ふしを思ひおくかな

といふ歌などを聞けば、子持たらぬ人も【6】親の心は思ひやられて、あはれなるぞかし。

この外の事もみなこれと同じ心ばへにて、世の人の己がさまざまほどにつけつつ②(身の上に思ふ心)は、みなよく汲みて知らるれば、みづからその事に触れねども、その事の心ばへを思ひ知るは、歌なり。人の情のやうを深く思ひ知る時は、【6】世のため人のために悪しきわざはせぬものなり。これまた、物のあはれを知らする功德なり。かく人の心を汲みてあはれと思ふにつきては、【6】身の戒めになること多かるべし。まづ右の歌などを聞きて、親の子を思ふ情を推し量りなば、その恩を知りて、不孝のふるまひはすまじきものに思ひなりぬべし。その外もこれに準へて思ふべし。この外なほ物のあはれを知らするにつきて、③(その益)多かるべきものぞ。

(本居宣長「石上私淑言」による)

タブ 2

【問題】

問一

傍線部①の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 娑縮して
- 2 しっかりしていて
- 3 かたくなで
- 4 あさましく

問二

空欄〔 2 〕に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 心ばへ
- 2 功徳
- 3 戒め
- 4 恩

問三

空欄〔 3 〕に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 生みの親より、育ての親
- 2 親の心、子知らず
- 3 井の中の蛙、大海を知らず
- 4 打たれても親の杖

問四

和歌【A】は、本文でどのような和歌として位置づけられているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 老いと病の混乱状況を詠んだ和歌
- 2 子を持つ親の気持ちを詠んだ和歌
- 3 親心にひそむ不可解を詠んだ和歌
- 4 恩愛から生ずる苦悩を詠んだ和歌

問五

和歌【B】に用いられた修辞技法の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 掛詞と縁語
- 2 縁語と序詞
- 3 序詞と枕詞
- 4 枕詞と掛詞

問六

空欄〔 6 〕(全部で4箇所ある)に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 こまやかに
- 2 あながちに
- 3 おのづから
- 4 わりなくて

問七

傍線部②は何を「身の上に思ふ」のか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 「思いやり」
- 2 「人の情のやう」
- 3 「身の戒め」
- 4 「物のあはれ」

問八

傍線部③が指示するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 「心」の益
- 2 「諺」の益
- 3 「恩」の益
- 4 「歌」の益

問九

本文の作者による著作として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 蘭学事始
- 2 うひ山ぶみ
- 3 古事記伝
- 4 源氏物語玉の小櫛

タブ 3

【解説】

【解答一覧】

- ・問一:3
- ・問二:1
- ・問三:2
- ・問四:2
- ・問五:1
- ・問六:3
- ・問七:2
- ・問八:4
- ・問九:1

【解説と講義】

問一(語句の意味)

正解:3

「心こはごはしく」。「こはし(強し)」は「固い・強い」という意味だ。ここでは、文脈が重要になる。

直後に「なさけなき(情趣を解さない)」とある。つまり、「柔軟な心がなく、頑固で融通がきかない」というマイナスの文脈だ。

よって、「かたくなで」を選ぶ。単語帳になくても、漢字のイメージと文脈で推測する力が私大では試される。

問二(空所補充・文脈)

正解:1

直前:「その事に触れざれば(経験しなければ)」

直後:「その事の【 】は知られぬ」「富める人は貧しき人の心を……」

具体例として「心」の話が続いている。文脈上、その事柄の「事情」や「心情」を指す言葉が入る。

「心ばへ」は「気立て・性質・意味」などを表す重要語だ。ここでは「その事柄の内実(心)」という意味で使われている。

問三(ことわざの知識)

正解:2

文脈を見るぞ。「富める人は貧しきを知らず」「若きは老いたるを知らず」。つまり「当事者にならないと、相手の気持ちはわからない」という流れだ。

その流れで、「子を持ちて親の恩は知る」という「知る」例と対比されているのが、「【3】とも(言われている)」だ。

ここには「(まだ)知らない」という意味のことわざが入る。「親の心、子知らず」がドンピシャだ。

近大レベルなら、この程度の慣用句は常識として処理したい。

問四(和歌の解釈)

正解:2

兼輔の中納言の歌(【A】)だ。

「人の親の心は闇にあらねども 子を思ふ道にまどひぬるかな」

(親の心は闇ではないけれど、子を思う道では迷ってしまうものだなあ)

これは「子を思う親の盲目的な愛」を詠んだ超有名歌だ。

本文でも「子持たらぬ人も……親の心は思ひやられて」とある通り、「子を持つ親の気持ち」を詠んだものとして引用されている。

問五(修辞法)

正解:1

俊成の歌(【B】)だ。

「をざさはら(小笠原)風待つ露の消えやらで この一ふしを思ひおくかな」

ここには、私大古文で頻出の技法が詰まっている。

1. 掛詞:「ふし」が「(笠の)節」と「(この)節=事柄・件」の掛詞。

2. 縁語:「小笠原」に対して、「露」「ふし(節)」が縁語。

よって「掛詞と縁語」の組み合わせだ。

※「露の」は「消え」にかかる比喩(～のように)であり、枕詞ではない。「風待つ露」が序詞かどうかの判断よりも、「ふし」の掛詞が確実に見抜けるかがポイントだ。

問六(重要語)

正解:3

「おのづから」は、古文では「自然と・ひとりでに」と訳す超重要単語。

本文の論理はこうだ。

「歌を聞けば」→「経験のないことでも」→「自然と(自動的に)想像されて」→「感動する」。

作為的に無理やり思うのではなく、歌の力によって「自然とそうなる」というニュアンスには「おのづから」が入る。

問七(指示語・内容把握)

正解:2

傍線部②「身の上に思ふ心」とは何か。

これは、人々がそれぞれの立場(身の上)において感じる「喜びや悲しみなどの感情」のことだ。

すぐ後の文を見てみよう。「人の情のやう(=人間の感情のありよう)を深く思ひ知る時は……」とある。

つまり、「身の上に思ふ心」を汲み取ることは、すなわち「人の情のやう」を知ることだ。

言い換え表現を見つける問題だ。「物のあはれ」はもっと大きな概念(主題)であり、ここは具体的に人々が抱く感情(情のありよう)を指す2が適切だ。

問八(指示語)

正解:4

傍線部③「その益(やく)」。何の効果・利益か。

この文章全体のテーマを思い出そう！

「歌(和歌)」があるから、経験していない人の心もわかり、物のあはれを知り、悪いことをしなくなる、と言っている。

つまり、この「益」をもたらす主体は「歌」だ。

筆者(本居宣長)は「歌の効用」を説いているのだから、ここは迷わず4を選ぶ。

問九(文学史)

正解:1

これは落としてはいけないサービス問題だ。

・本居宣長の著作:『古事記伝』『玉勝間』『うひ山ぶみ』『源氏物語玉の小櫛』など。

・『蘭学事始』:これは杉田玄白の著作だ。

近大では、こうした基本的な文学史知識だけで1問取れることがある。

タブ 4

【練習問題】

Q1: 重要単語

古文単語「おのづから」の意味として、最も適切なものはどれか。

1. 偶然に
2. 自然と
3. 自分から
4. 無理やりに

Q2: 文学史

江戸時代の国学者、本居宣長の著作として誤っているものを一つ選べ。

1. 古事記伝
2. 玉勝間
3. 源氏物語玉の小櫛
4. 雨月物語

Q3: 修辞法(レトリック)

和歌において、一つの言葉に二つの意味を持たせる技法(例:「まつ」に「松」と「待つ」を込める)を何というか。漢字二文字で答えよ。

Q4: 重要単語

「なさけなし(情け無し)」の意味として、適当でないものはどれか。

1. 思いやりがない
2. 風流心がない(情趣を解さない)
3. 情けない(みつともない)
4. 身分が低い

Q5: 古文常識・文学史

本居宣長が提唱した、『源氏物語』の本質を表す重要な美的理念は何か。

1. 勸善懲惡
2. わび・さび
3. 物のあはれ
4. 幽玄

タブ 5

【練習問題の解説】

A1:2(自然と)

- 解説:「おのづから(自ら)」は、文脈によって「①自然と・ひとりでに」「②偶然・たまたま」「③(仮定を伴って)万一」の意味になる。最も頻出なのは「自然と」だ。現代語の「己(おのれ)」から「作為的」な意味を連想しないよう注意。

A2:4(雨月物語)

- 解説:『雨月物語』は上田秋成による怪異小説(読本)だ。本居宣長の著作(古事記伝、玉勝間、源氏物語玉の小櫛、うひ山ぶみ等)は「国学」の柱としてセットで暗記。

A3:掛詞(かけことば)

- 解説:同音異義語を利用して意味を重ねる技法。私大入試では、和歌の解釈問題で「何と何が掛かっているか」を問われることが多い。
- 例:「長雨(ながめ)」=「長雨」と「眺め(物思い)」

A4:4(身分が低い)

- 解説:「身分が低い」という意味はない。「なさけ(情け)」は「人情」と「風流心」の二面性がある。したがって「なさけなし」も「薄情だ」と「風流心がない(無粋だ)」の二つがメインの意味になる。「情けない」という近代的な意味もあるが、「身分」とは関係ない。

A5:3(物のあはれ)

- 解説:宣長は、儒教的な「勸善懲惡」で『源氏物語』を読むことを否定し、人間のありのままの感情に触れて感動する「物のあはれ」こそが本質だと說いた。

タブ 6

【現代語訳】本居宣長『石上私淑言』

また、(歌を通して「物のあはれ」を知るということは)、そのように政治を行う人(為政者)だけに限ったことではない。ただ世間一般の付き合いにおいても、この「物のあはれ」ということを理解しない人は、万事について思いやりがなく、心が頑固で融通がきかず、情愛(風流心)に欠けることばかりが多いものである。

そもそも何事も、その事柄を自ら経験しなければ、その事柄の事情や心情は理解できないものであって、

(たとえば)裕福な人は貧しい人の気持ちがわからず、若い人は老人の気持ちがわからず、男は女の気持ちがわからない。

世間のことわざにも「親の心、子知らず」とも、また「子供を持ってはじめて親の恩を知る」とも言っているが、(そのような状況において)、

兼輔の中納言の、

【A】(子の行方を心配する)親の心は闇ではないけれども、子を思う道においては、分別を失って迷ってしまうものだなあ。

という歌や、

俊成の三位(藤原俊成)が、病で死を覚悟した時に、「(息子の)定家卿の、中将への転任のことをお願いします」と言って、範光朝臣のもとへ送った、

【B】小笠原の風を待つ露のように(私の命は)消え残っておりまして、この(息子の昇進という)一件を、心残りに思っております。

という歌などを聞くと、

(実際には)子供を持っていない人であっても、自然と親の心が想像されて、しみじみと感動するのである。

これ以外の事柄もみなこれと同じ趣旨であって、世の人々が自分のそれぞれの境遇に応じて心の中に思う感情を、みなよく汲み取って理解できるので、自分自身はその事柄を経験していないでも、その事柄の心情を思い知ることができるのは、歌(の力)である。

他人の感情のありようを深く理解する時は、世のため人のために悪い行いはしないものである。

これ(=悪事をしなくなること)もまた、「物のあはれ」を知らせる(歌の)功德(ご利益)である。

このように人の心を汲み取って「ああ、尊い(悲しい)」と思うことについては、我が身の戒めになることが多いはずだ。

まず、右に挙げた(親の心を詠んだ)歌などを聞いて、親が子を思う愛情を推し量ったならば、その恩を感じて、親不孝な振る舞いはするまいと思うようになるはずだ。

その他のことも、これに準じて(同様に)考えるがよい。

このほかにも、やはり「物のあはれ」を知らせることについては、その利益(効果)が多くあるに違いないのだ。

【訳のポイント】

1. 「逆説」と「対比」を意識

- 前半で「普通の人は、経験しないと他人の気持ちがわからない(富者 ⇄ 貧者)」という現実を突きつける。
- しかし、後半で「歌があれば、経験なくてもわかる(子なし ⇄ 親心)」という歌の効用を説く。
- この構造が訳文から読み取れればOK

2. 歌の訳し方

- 【A】「闇」=心の迷い。親バカゆえの盲目的な愛。
- 【B】「一ふし」=「竹の節」と「一件(息子の就職のお願い)」の掛詞。
- 訳すときは、比喩や掛詞の意味を(カッコ)で補ってやると、文脈が通じやすくなる。